

Ⅲ 本件放送に至る経緯と問題の発覚

1 CSニュースから地上波ニュースへ

本件放送には、一般のニュース番組と異なる特徴があった。それは、CSのニュースチャンネル「日テレNEWS 24」と地上波のニュースがタイアップし、しかもCSニュースのほうが地上波より先行して放送されるという編成になっていたことである。

上記CSチャンネルでは、日本テレビの報道局が月曜日から金曜日まで『まーけっとNAVI』の制作を担当している。この番組の毎週金曜日のコーナーに「汐留リーダーズEYE」があり、話題の企業を録画で紹介しながら、その経営者のスタジオでのインタビューを放送していた。この「汐留リーダーズEYE」を短縮したものが、翌土曜日の地上波の番組『news every. サタデー』で同名のコーナーとして放送されていた。

しかし、局内や制作スタッフのあいだから「週末夕方の番組で、企業の経営者を紹介しても、一般の視聴者は親しみが持てないのではないか」、「もう少し視聴者の目線に立って経済の事象をわかりやすく取り上げたほうが受けるのではないか」等の意見があり、そういう観点から、2010年10月、コンセプトが変更になった。こうして「汐留リーダーズEYE」の内容を生かしつつ、ひとつの企業にこだわらず、関連する業界のさまざまな事象を幅広くわかりやすく紹介する、という方向に転換されることになった。その際にコーナーの名称も「ぐるぐる経済」へと変更された。

2 「ぐるぐる経済」の制作体制

「ぐるぐる経済」は経済部が担当するコーナーであるため、『news every. サタデー』の番組担当デスク以外の制作スタッフは、経済部に所属する企画統括デスク1人と経済部のディレクター4人だった。ディレクター4人のうち3人は、外部の制作会社から派遣されている常駐のスタッフで、本件放送を担当したAディレクターも派遣スタッフだった。

毎週水曜日に開かれる企画会議の場で、ディレクターが企画の提案を出す。ディレクター4人は交代で制作にあたり、原則として1つの企画は、1人が企画の提案から取材、編集までを担当していた。企画の決定から放送予定日までは1か月以上あることが多かった。

各ディレクターは日常的な取材・制作業務については、直属の上司である企画統括デスクに制作の進捗状況を報告したり、取材の指示を受けたりしていた。また、ディレクターは状況に応じて番組担当デスクに相談し、助言を受けることなどもあ

ったという。

3 本件放送の企画提案と取材交渉

本件放送の企画は、2010年10月27日の企画会議で提案された。

Aディレクター（当時31歳）は、2006年12月、CS放送の『まーけっとNAVI』の担当として日本テレビ経済部に派遣され、「汐留リーダーズEYE」の制作にあたりるとともに、2009年からは、遊軍としても勤務していた。

Aディレクターはインターネットによる情報収集、経済部のスタッフへの相談などを経て、本件放送で紹介することになるペットビジネスへと企画のテーマを絞り込んでいき、11月上旬には、上司からの了解も得た。

Aディレクターは、下見をしたペットサロンで利用客に取材の申し込みをしたが、「ペットの撮影はいいが、自分は顔を出せない」と断られた。このため、ペットサロンを経営する会社の広報に、撮影に協力してもらえる利用者の紹介を依頼し、会社役員インタビューも申し込んだ。

一方、ペット保険の利用者を自力で探すことは困難と考えたAディレクターは、ペットサロン会社と同じように、ペット保険を取り扱う会社の広報に、利用者の紹介を依頼した。連動するCS放送の「汐留リーダーズEYE」はペット保険会社を取り上げることになり、役員の生出演も依頼した。

ところが、11月25日ごろ、双方の会社から相次いで「利用者の紹介はむずかしい」という回答があり、かわりに「サービスを利用している社員なら紹介できる」という提案がなされた。Aディレクターは、社員以外でお願いしたいと頼んだが、両社とも「社員以外は紹介できない」との返答だった。

Aディレクターは、ペットサロン会社から「11月30日までしか役員が取材に対応できない」と期間を限定されたこと、また放送予定が12月となっていたことなどもあり、「良いことではない」と考えながらも、「社員であっても利用者であることには違いない」と判断し、両社からの提案を受けることにした。

4 本件放送の取材

11月30日にまずペットサロンの取材が行われた。Aディレクターとカメラクルーは、犬と飼い主がマッサージを受ける様子の撮影や、ペットサロン経営会社の役員インタビューなどを店舗内で行なった。

12月4日、Aディレクターはペット用品店で取材を行い、同店の実際の利用者にその場で声をかけ、インタビューを収録するなどした。

12月6日には、ペット保険関係の取材が行われた。

まず、動物病院で犬の飼い主と待ち合わせ、動物病院での様子を撮影した。その

後、自宅で過ごす飼い主とペットの撮影が行われた。のべ3日間の取材で、カメラマンは毎日交替したが、この日のカメラマンは、飼い主の自宅と動物病院が車で1時間近く離れていたため、そんな遠くからこの病院まで通うのかと疑問を抱いた。

この疑問を呈示されたAディレクターは、ペット保険を扱っている動物病院はそれほど多くないので、ペットを預けて会社の帰りに連れて帰る人も多いらしい、という説明をした。カメラマンは一応納得して、飼い主の自宅へロケバスで向かった。飼い主とカメラスタッフのほかに、ペット保険会社の広報社員2人も同乗した。

自宅内の撮影後、Aディレクター、カメラマン、ペット保険会社の広報社員2人は都心にある本社に向かった。ところが、自宅での撮影が終わった飼い主もロケバスに乗り込んできたので、カメラマンは再び不審に感じた。保険会社がある方面に用事があり、途中まで同乗するのだろうかと考えたりしたが、飼い主と広報社員の親しげな様子に触れて、ますます訝しく感じるようになった。

ペット保険会社に到着した際、カメラマンは、飼い主が会社に入っていくような関係者であることは間違いないと思ったが、機材のセッティングなどで目を離しているすきに、飼い主の姿を見失った。

会社内の撮影の際にもカメラマンは、もしかすると飼い主が社内にいるのではないかと周辺に目を配っていたが、確認することはできなかった。

カメラマンはAディレクターに、会社と飼い主の女性の関係を確認めたほうがよいと助言した。しかし、自分の思い過ぎかもしれないとも考えたカメラマンは、このことを誰にも報告しなかった。12月10日にはCS放送の「汐留リーダーズEYE」で、ペット保険会社の番組が予定どおり放送されたため、カメラマンは、問題はなかったのだろうと受けとめた。

5 本件放送のオンエアと問題の発覚

提案から取材、編集に至る一連の制作過程で、経済部企画統括デスクは、Aディレクターに何度か「順調（に進んでいるか）？」などと声をかけたが、そのつどAディレクターは「順調です」と答えていた。悩んでいる様子はいかがえなかったという。番組担当デスクにもAディレクターから相談はなく、すべては問題なく進んでいるように見えていた。

編集したVTRは最終チェックを問題なく通過した。よく取材しているという評価もあった。

本件放送は、CS放送の「汐留リーダーズEYE」の翌日の12月11日に『news every. サタデー』で放送される予定だったが、当日はニュースが多かったため、2011年1月8日まで放送が延期された。

放送から10日後の1月18日夜、局の視聴者センターに1通のメールが届いた。

ペットサロンの利用者が、ペットサロン経営会社の社員であることを指摘するものだった。

ただちに経済部長らがAディレクターに直接面談して、詳細な事実確認を行った。その結果、ペットサロンについての視聴者メールの指摘は事実であり、しかもペット保険についても同様に、取材した利用者が社員だったことが判明した。

日本テレビ側の聴き取りに対して、両社からは「Aディレクターから一般の利用者を取材したいとの依頼を受けたが、適任者が見つからず、利用している社員なら紹介できると伝え、そうなった」という趣旨の返答があった。

6 お詫び放送

これらの事実確認を受けて、日本テレビは、1月22日の『news every. サタデー』で、以下のお詫び放送をした。

今月8日のこの番組で、最新のペットビジネスに関するニュースをお伝えしました。この中で、ペットサロンとペット保険を利用する女性客を取り上げましたが、これらの女性が、ペットビジネスを運営するそれぞれの会社の社員であることがわかりました。公正であるべきニュースの取材対象としては、不適切な内容でした。視聴者の皆様に深くお詫び申し上げます。

日本テレビは、1月24日の『Oh a! 4 NEWS LIVE』でも同趣旨のお詫び放送を行い、同番組のホームページにお詫びコメントを掲載した。

その後、社内には、報道局次長をリーダーに、報道局とコンプライアンス推進室の合同検証チームが作られ、本件放送に関係したスタッフなどへの聴き取りが行われた。その結果は「『ペットビジネス最新事情』企画における不適切手法について」という報告書（以下、「報告書」と記す）にまとめられ、2月15日に当委員会に提出された。「報告書」には、当面の取り組みや今後の改善策なども記されていた。

さらに4月には、日本テレビ報道局が自主的にとりまとめた、問題点の考察と再発防止策を総括する詳細な内部文書が、委員会に届けられた（以下「内部文書」という）。これについては、第VI章で言及することにする。